



岐蘇林多

目次

▲紀行

南滿州旅行記
山、山、山
第二學年修學旅行記

▲感想

甲州に來てから
病床より
感想

▲雜報

學校記事
大正五年度豫算
論會便り
寄宿舎通信
會員消息
其他

大正五年七月二十五日 第八拾壹號 每廿五日刊行 (明治四十四年六月十四日) (第三種郵便物認可)

南滿州旅行片々 (其二)

在京城 本多清右衛門

八、南滿州鐵道會社

南滿州を知らんと欲すれば滿鐵會社を知らざる可からず吾人は常に如何に同會社の規模の大なるかを想像し居れり今や大連を中心として附近の状況を記し終るに際し同會社の沿革内容を探るも亦趣味あれば此に記すこととせり

イ、沿革

明治三十九年九月日露講和條約に依り東清鐵道會社に屬する長春旅順間の鐵道及各支線に屬する凡ての權利特權財産及炭坑を譲り受け三十九年六月勅令第四百四十二號を以て會社設立に關する規定を發布し設立委員を任命して會社設立事務の管理に關する命令書を交付したり設立委員は同年十月第一回の株式募集を了り十一月設立認可を得十一月設立の登記を終り野戰鐵道提理部其の他より財産の引繼を受け四十年四月一日より業務を開始し現在に至れり

ロ、組織

事務局長 庶務課調査課
總務部 交渉局 第一課 第二課
技術局 保線課 土木課 建築課
運輸部 營業課 運轉課
計理部 會計課 用度課
礦業部 礦業課 販賣課

地方部 地方課 衛生課

ハ、事業

東京に支社及東亞經濟調查局を置き大連又は鐵道沿線に於ける工場、電氣作業所、瓦斯作業所、埠頭事務所、築港事務所、中央試驗所、地質研究所、奉天公所、撫順炭坑、產業試驗所、經理係、保線係、車輛係、驛、學校、病院、南滿醫學堂、等の如き本社の經營に屬するに南滿州に於ける諸般の機關一つとして會社の手にならざるものなく南滿州は即ち滿鐵會社なりと云ふも敢て過言にあらざるべし殊に沙河口に於ける會社の工場之如き其の規模の廣大なる優に東洋一と稱し居れり又大連發電所の煙突の壯大なる之亦東洋一と稱せらる

ニ、資本

本會社は株式組織にして資本金二億圓なり之れを株式一百万株(一株二百圓)に分ち内一億圓は政府の出資に係り滿州に於ける既成の鐵道及之れに附屬せる一切の財産並に撫順及煙臺の炭坑を以て之に充て殘額一億圓は之を日清兩國人より募集し本社を組織せり而して會社は明治四十年政府より財産の引繼きを受くると同時に主として鐵道炭坑の二營業を開始し爾來着々事業の進捗擴張を圖り今や會社の經營する事業は頗る多岐に涉り依然南滿州に於ける王者の如く滿鐵ありて初めて南滿州あるの感あらしむ而して本社の林業部は地方課に附屬し微々と

して番はざるの感あれども近時漸く林業に注目し鐵道沿線主要の都市に苗圃を設置し着々之れが施設をなし擴張せられつゝあるは吾人の意を強うするに足れり沿線熊岳城には本なる苗圃を設置し主任技師として林學士を置く云ふ亦松花江流域の森林調査は二三年前より開始し近き將來に於て調査發表を見るべく今後滿鐵に於ける林界は益々多事なるべく斯界の爲め發展を望むや切なり

三、陸上戰蹟

陸上戰蹟に就き述べんと欲すれども已に諸君に於て書籍上御承知の事なれば余は余の實地見聞せし其の儘の状態及所感を述べて此の稿を終らんとす
元來旅順の地勢たる天然の要塞をなし四周山岳を以て圍繞せられ陸上は水師營に通ずる道路即ち龍河により僅に連脈を接斷し居ると海上は所謂旅順口により海洋に通ずるのみにして其の他は全部山岳を以て蔽はれ實に自然の大險たり加之露國に於て二億圓を投して人工的築城をなしたれば難攻不落と稱せらるる過言にあらざるなり而して余の實地視察したる砲臺は東鶏冠山砲臺二龍山砲臺松樹山砲臺等にして其の他無數の小砲臺を實見せり而して砲臺の構造等に就きては門外漢の余が今更喋々述ぶるの煩を避け砲臺附近の實況を述べんと欲す
砲臺は何れも多筋より少しく下りたる小峯



全部コンクリートに小砂利を混し厚さ七尺乃至十尺に固め形状は凸字形をなし深さ七八尺大砲は中央突出部に据へ兩側に掩蔽部あり而して其の後方に一般守備兵の掩蔽部あり其の規模の廣大なるには一驚せり外方(即ち敵に面する方)より之れを望む時は山と變りなし内方(即ち己方に面する方)より之を見れば吾人素人眼にては砲臺の如く見ゆるもの之れ守備兵の掩蔽部の窓にして實際の砲臺は見えず(砲臺と掩蔽部とは隧道に依り連絡を取り最も安全なり此の難攻不落の築城を如何にして陥落せしやに至りては想像たも及ざる所なり唯「神の業なり」と云はんのみ東鶏冠山砲臺附近の實況を見るに已に十星霜を経過したる今日尙砲臺の跡大砲の破片至る所散亂し且つコンクリートの破片飛散七其の慘憺たる實況當時を追想し感慨無量なり聞く我が忠勇無比なる兵士

亦故なきにあらざるなり此には何等の當時の施せる殘影なく忠魂塔のみ不朽に天を望み居るのみ
二〇三高地 乃木將軍

爾靈山險豈難攀 男子功名則古難
鐵血覆山山形改 萬人齊仰爾靈山

鐵條網其の他の防禦物は今は存するものなし戦利品陳列館前に當時使用せしものなりと稱するものありたり而して旅順の周圍は全部砲臺を以て圍繞せられ山と云ふ山岡と云ふ岡砲臺ならざるはなし有名のクロバトキン砲臺は松樹山砲臺の連脈にして畑中に突出せる小丘なり赤松林の純林中にあり今は旅順の水源地たり其他海防砲臺としては老鐵山黄金山砲臺あり渤海灣を望み砲門を向け我が海軍を苦しめたる所現時は我海軍に於て使用し要塞地帯にして隨時入所を禁し居れり而して目を一度旅順市街に投せんか當時の彈痕今尙存し大廈高樓砲臺の爲め破壊せられ其の儘にて殘存する慘憺たる状目も當てられずステツセル將軍の別墅とか新市街裏手山腹にあり今は空家となり居れり海兵團の跡は工科學堂となり露國民政署の跡は關東都督府と變り其の他當時の建築物は全部日本人の手に歸し經營せられつつあり噫々昨日の夢は今日と覺めて一片の煙と消えぬ榮枯盛衰は世の習とは知りながら亦一掬の涙無きにしもあらず然れども吾人の立場よりするときは實に余は痛快を絶

叫せざるを得ざりき要するに日本人たるもの一度は必ず來て馮吊すべき所なりとす (未完)

山山山 (中)

旅行日記の中より 岩田生

吉野杉 吉野丸太 吉野美林と日頃之等の語に憧れたる吾等は今日しもそれを視るべく吉野輕鐵六田驛にマツチ箱の如き汽車を拾つ、吉野川を脚下に瞰つ、進めば山愈々時ち川愈々急に清冽の氣身に覺り坐ろ蘇峽の山河を偲はしむ、夏旅の山里にうれしきは到る處に清泉の溢れ出づると息ふべき樹陰の多き事なり、吾等は玉水に喉を潤し樹陰に汗を拂ひ之より宮瀧と大瀧との間なる上下五十餘町の五所峠にさしかかりぬ「急がば廻れ」と口にしながら急ぎ廻らず五歩六歩の先がけに謂ふべからざる快感と一種の誇とを覺ゆること往々あり、吾等(北村先生、松島君僕)は今時の麓に一の小徑を見出しいざ魁の功名をこは思はねど急坂なれば一步にても經濟的にとれを登りて廣き道に出で後の一行の見ざるに例の一種の誇と快感に迂迴せる人達の遅れたる事など語り合ひ十町餘りも來て待てども「一行の見ざるより傍なる袖小屋にて尋ねればこは山徑なりと答へぬ、吾等は茫然として先の元氣も消え失せ詮方なく引返し半途餘りも遅れて一行の殿をなせり」且

は肉彈に肉彈を以てしたるも其の効果なく遂に正攻法により地中を掘り砲臺下に至り火藥を以て一舉に爆破せしなりと而して前而山腹には歩兵の塹壕恰も針さしたる如く加ふるに傾斜亦急にして凡三十度以上あり殊に望臺の如き其の傾斜急にして四十度以上もあるかの如く見受けする其の頂上には二門の十五加農砲今尙存す之れ我が軍を最も苦しめたるものなりと云ふ望臺は此の附近に於ける最高峰にして當時二〇三高地と相對し旅順の生命は一つに此の二砲臺の陥落如何により決せられたるなりと頂上より俯瞰すれば旅順舊市街は一目の中にあり余の此の附近視察中旅順守備隊の兎狩りあり散兵し兎軍を下りより望臺指して狩り上る様當時の實況斯くやありしならん痛快なりき其の他二龍山松樹山砲臺の如き何れも其の當時の儘にあり砲の破片コンクリートの飛散目も當てられず殊に二龍山砲臺爆破の實況の如き山崩れしたる如き有様如何に當時の攻撃の烈しかりしやを思ふに餘りあり
二〇三高地は遠く紀念塔を頂上に戴き雲間に聳へ當時の慘憺の狀を思はしむ此の山秃山にして一木も見す現在は都督府にて殖林し落葉松赤松等生へ茂り居るも何んとなく涙を催さしむ山は此の附近にては望臺と相對し最も高く一望の中に旅順市街を瞰下し得べく幾万の生靈を犠牲に供し奮闘せしも

に帽を龍孫に掛ければ夕に帽は九天に朝せん」と世の成功を急ぐ者往々にして誤れる道に迷ひ入ること斯の如きもの多し「急がば廻れ」なるかな、峠に登り詰めて見渡せば大臺原の秀峯群山の間より抜け出で、呼應の間にあり、獨り吉野川のみならず紀伊の熊野川、伊勢の宮川も亦その源は此の山の葎の零萩の下露なり、此の山に連る幾多の山には深き谿底より巍峩たる嶺まで杉檜の密樹争ひ立ち鋭き梢頭は無限の天空に向ひて何事かを翹望しつゝあるに似たり
木曾の美林が天然林の覇なれば此處の山は人工林の王なり、銳きは此の山林にして古雅なるは木曾の山林也、清酒なるは此の山林にして朴直なるは木曾山林也、就きて究めたきは此の山林にして入りて親しみたきは木曾の山林也
宿舎に於ける一時間餘に亘る土倉翁の講演に山林家の卵なる一行をチャームされぬ、森林經營は正に經濟民の偉業也自働車を驅つて議事堂に參集する堂々たる政事家中にも或はこの山峽に蟄居して植林經營に餘念なき無言の大政事家に及ばざること尙遠きものありやなしや、今の世にアダムスミスであらしめば「山林は私すべきものにあらず」の言に對して翁の如き人を推して其の主義の眞なるを極言するなるべし
吉野山一誦む度毎に櫻花滿山に霞める陽春の壯美を想はしむ「されどろの花下陰に演

せらるゝは幾盞の玉箒に狂へる人々の喜劇にはあらで、或は白雪に埋もるる峯に分け入りて今生の訣れに泣ける数奇の名將薄幸の貞婦の節、或はかりゆめの御宿に御憤の涙乾く暇もあらせられず永劫盡きざる御怨恨と共に雲隠れ給ひし不遇の英主の御面影或は高檣に腹掻き切り臍腑を掴み出し板扉に投げ付けて賊軍の膽を寒かしめし悲壯なる忠烈の最後或はとて世に永らふべくもあらずと假の契りを辭して哀別せる名將美姫の姿など心にも山にも満つるは悲愁の劇のみ新家先生の和歌の思ひのまゝの旅にあらざれば一夜の宿を借らん由もなく時間の短きをかこちつゝ遅れてはと走り下りぬ(塔尾の御陵を拜して)

第貳學年修學旅行日記(承前)

五月拾四日 日曜日 横井正守
明くれば天氣晴明にして、有明の月は今し西、山の端に没せんと欲し、溪流は涓々として、自然の琴を弾く、あだかも吾々一行の別を惜むに似たり、七時廿五分こゝ仙境を後に、車上の人となりて國府津にむかふあたりの山山、山麓には竹林多くしは、中腹より次第に、潤葉樹の繁茂するを見る。行く事暫時にして、小田原に着しこゝにて

下車し、二宮報徳神社に参拜し、北條氏の居城たりし小田原城址等を見、再び車上の人となりぬ。南は巨海漫々とて、鷗の如き白帆の往來するも亦風情あり。かくて、九時國府津着、同十分東海道線列車に乗り、汽笛一聲はなれ行く、二宮を過ぐれば、早くも海水浴場として有名なる大磯に着しぬ。それより、平塚、茅ヶ崎、藤澤等の小驛もいつしか後にして、大船に着し、此處にて乗り替へ、横須賀線に入る。昔源頼朝が幕府を開きたる鎌倉海濱の優美なる逗子、田浦等の驛も過ぎ、幾多の隧道を通過し、かくて十時四十九分横須賀驛に着し歩を軍港に運ぶ。案内の將校に伴はれて工廠内に入るや、左上高く空中に屹立せる陸上グレインの、偉大なるに、一同先づ驚異の眼を張りぬ。ドック内には目下修繕中の桐、橘等のの驅逐艦あり、軍港内には山城金剛等の諸艦をばどめとして、十數雙の大小軍艦、飛行機の母艦たる若宮丸等も碇泊し、膝々たる黒煙を擧げて威風凜凜たり、吾等は朝日艦の參觀を許されぬ。將校の案内により上甲板より次第に、詳細なる説明を聞きつゝ、艦内を一巡し、軍艦生活の如何に勇壯にいかん規制的なるかを感ぜり。本艦は今や老朽艦として、新式軍艦には及ばざれども、總噸數一萬四千七百六十五噸にして、明治三十三年英國グラスコットに於て建造せられた十二吋砲四門、六吋砲十四門、三吋砲三十

二門、乗組員八百三十名を有し、かつて、日露戦争時代にはかの軍神廣瀬中佐の乗艦として、偉大なる戦功をたてたりと云ふ參觀を了し歸路につく、左上小高き所には、無線電信局あり。案内者の話によれば、千波万波を越わたる、シドニー、ハワイ等は、また、間に音信を通ずる由にて、吾人は今更年々文明の力の大なるに驚かざるを得ざりき。夫より再び横須賀驛に引き返り、三時二十五分の列車にて鎌倉に向ひ、同五十三分鎌倉着。一行はそれより八幡宮に参詣しぬ。彼の公曉がかくれしと云ふ大銀杏は、石のきざしはしの左に、今も尙巍然として中空に聳わたり。夫より東の丘の上頼朝の墓を訪ふ。松相風に吟じ荆棘徒らに生ひ茂れる中、蒼苔滑かなる五重の石碑一個を残すのみ、あゝ一世の英傑も時劫の前に誠は風前の塵の如き哉、尙東北に進みて鎌倉宮に詣で、護良親王が怨魂を岩窟に弔ひ歩を返して、圓覺、建長、長谷等の古寺を訪ひ、七里ヶ濱を磯傳ひに繪の島に向ふ。日はいつしか西山に没し、海上月清くかゝれば湖風をよくと磯松の梢を訪れ蟹の家の灯所々に見ゆるなど佳景幽趣筆舌の及ぶべきにあらず。暫くは恍として我を忘れぬ。かく稲村ヶ崎、腰越等の史蹟をさぐり、江の島はるびすや旅館に、旅行第四夜の夢を結びぬ。

五月十五日 月曜日 小林右内

明くれば十五日今日も天候快晴なりとして一同喜色面に現はる七時旅館を辭して渚に出づればこゝは片瀬村と一衣帯水を隔てて白砂平敷し梯するに長棧をもつてせり盤旋して磴道を登れば島の最高とも思はるる緑樹鬱蒼たる處辨財天を祀れる有り境内を過ぎて東岸に到れば數多の旗亭の涯に臨みて立てるあり涯の下はと見れば宛ら虎豹の起伏するが如き巖に太平洋の大波寄せては返し返しては又押し寄する波音いとすこく大地も爲に震撼するかと疑はしむ右手には豆相の峯巒淡々として笠ね大磯小磯亦水煙渺茫の中にあり明け暮れ山を友とせる吾人には此の開豁なる眺望が如何にも珍らしく亦面白く濱邊に貝を拾ひ魚を捕ふる蟹の仕業も見捨て難けれど發車時刻の迫れるに已むなく畫の嶋を辭して片瀬に至り電車に投じて藤澤に到る茲より急行列車にて愈々上京の途に着く横須賀線の分岐點たる大船も貿易總額二億五千と算せらるる大阜頭横濱も談笑の中に過ぎて午前十一時半東京驛に下車す流石は世界有數の大都會なれば交通機關の發達大廈高樓の鱗次櫛比せる悉く目を驚かす先づ千代田の城を仰ぎ奉るべく二重橋に到る御溝を隔て、石疊あり石疊の上老松蟠屈恰も翠嶽を張れるが如く其間より仄かに殿閣を拜し奉れば瑞雲變遷とじて神々しさ限りなし参拜終て乃ち神田連雀町なる旭樓支店に到る暑さ厳しく流汗淋漓たり一

同宿に著き汗を拭ひ喝を醫し一休の後小石川砲兵工廠に到り參觀を求めしが遺憾なる哉參觀を許されず乃ち後樂園のみ觀覽す案内者に依て園内に入れば綠樹榛々泉石清明涼味膚を徹し折柄の苦熱を忘れしむ一山あり曲磴を登れば奥に得仁堂八卦堂あり夷齋を祀れりとか又趣味に富める園池あり頗る廣大にして其形琵琶湖に似たり義公修史の當時此に催せしといふ曲水の宴も想ひ出ださる又木曾の寢覽の床に模せる勝景あり或は白糸の瀧あり田毎の月あり誠に天下の勝を一眸の内に入らむといふべし此の幽邃極りなき園内を逍遙すること約一時間にて再び紅塵萬丈の市中に吐き出されぬ直ちに道を九段坂頭に取り忠魂義膽を祭祀せる別格官幣大社靖國神社に詣づ夫より隊伍を解かれしを以て、或は遊就館に或は日比谷に泉岳寺に各がじし異なる方面に遊び隨意宿に歸る

五月十六日 火曜日 唐澤繁夫
本日も亦天氣清明にして一點の雲翳も無し遊子の意氣天を突くの概有り六時半と云ふに早くも旅宿を發したる一行は電車を宮益坂下に捨て駒場なる農科大學を訪ふ校舎の入口なる路傍には綠樹鬱蒼として枝を交へ悉く樹名を掲げて樹種を知るに便せり一行は懇切なる案内に依り限なく巡覽せしが規模の廣大なる設備の完全なる美望の念に堪へざるもののみなり校内に熱帯植物

七月十七日 水曜日 瀧澤銀治郎

待遠かりし自由行動の日も愈本日本となれり區々たる工場苗圃に非ず大帝都の隅々に到る迄觀破すべく與へられたるは今日にてあるなり今日こそは日は丑に出でて玄に入る、とも尙未満足し得ざるなり然れ共あゝ夫の無情なる朝來烟雲幾疊々動かされ共次第に

濃密を加へ終に滴々地を撲て来る雨は時と共速度を増して何時止むべしとも見えず都の空に憧がれて遙々鞋を解きし蘇山健兒の心中想ふべし真に残念なれども致方なし吾等は既に來てありし郷輩某君に連れられて先づ土野に向ひ偉容堂々たる大西郷の像を仰ぎ其より海の博覽會に向ふ百尋二百尋等種々に分たれし海中の模形の巧なる身は何時海中に來しかと驚くばかりなり出口には難船救助の有様を模せるあり山をわざむく大船も早既に逆まく浪の中に没入せんとしわづかに波上に現はるる舳には死人の如き遭難者の救助を叫べる様眞に迫りて身の毛もよだつ心地す既に此處を出づれば直ちに動物園なり規模極めて大なりとは云ふ可らざるも而も猛獸猛禽の隱處に咆哮叫鳴し或は美麗なる小鳥其の緩く或は急しく天樂を奏する等思はず我を忘れしむ辭して出づれば隣は博物館なり中に千歳の昔を語るミイラ有り始めての見物なれば互に先を争ふも可笑しかりき何種となく並べられたる古器物には無智未開の石器時代を想はするあり地輪、地輪馬を見ては御歴代の御仁徳の程も忍ばれて尊し鮮麗眼を奪ふ繪畫彫刻は世界に冠絶せる邦國の美術を示し嚴裝整然たる武者人形は日本魂の權化とも見え凄し其他博物館に工藝に其材料の豊富なる流石に博物館は博物館なり既にして出づれば雨愈々繁く泥濘甚だしく加ふるに日は既

に傾きけん天地暗うなり諸工場は盛んに笛聲を揚げて暮れ行く空を警むるに似たり
甲州に來てから 佐 伊 塔 生
△寒い、暑い、春だ、夏だ、こんな事を繰返して居る中に甲州に來てから最早あさ一ヶ月許りで満二年になるそうして又あの美しい葡萄が店にかざらるゝ頃も近づきました而し考へて見ても何にも別に記憶に残つて居るものもない。暑い暑い滅法暑い新聞を見て日本中の都市で最も暑い部だそんな事も其時々だ其時が過ぎると何にも記憶に残らない
△此二年近い日子の大半は出張して送つた天幕生活もして見た、炭小屋生活もした、全くの青天井の野宿もした、友の君は鹿を生捕にしたなんて事もあつた、まあ多くは猿や熊相手の山中生活であつた
こんな時には智育は元よりだが体育の必要精神教育の必要をつくづく感ずます
△甲州に來てから蘇峽會の人々も大分異動が有りました昨年宮崎君宮川君を送り今年小林君を送つた様な譯です(而し小林君は本縣の人であるし蘇峽會々則の示す山梨縣在住の云ふ意味から會を退いたと云ふ意味ではない)兎に角同君も種々の都合で役所の方はやめて郷里西八代へ歸られた而し本年は亦新しく伊藤君、矢島君の二人

を迎へる事の出來たのは友の殖れたと云ふ事からも喜ばしいと思ひます(之は或は吾々の様なナラズ者のある事に依つて或ひは三君の爲め不幸かもしれん)
△而し會と云ふもの、卒業生の會合と云ふもの其れはある意味から云ふとつまらんものかも知れぬ誠に其場其場の一時的のものかも知れぬにして其一個人に取つては誠に能もないものかも知れぬ、殊に現代實利主義打算主義から云ふと誠につまらんものかも知れぬ昔て蘇峽會に席を於かれ今は他に轉せられし賢明なる諸君(私の知る範圍)が云ひ合せた様に、忘れたのか或は理由があるのか又は前の實利打算主義から割出せしか年賀状一枚も來ないの不思議な位だ年賀状一枚出した所でも出さぬ所も餘り財政にも影響する譯でもあるまい而し年賀状全廢と云ふ人もあるから其の理由かもしれん(兎に角此様な理由が有つたら暴言を許し給へ)
△元より跡に残つた者は諸君の後輩でしかも吾々の様なナラズ者の居る會へ年賀状も手紙も出した所で一厘の徳もないかもしれん其かはり此方も無理にと望みもしない
△而し残つたものが後輩でありナラズ者であるとするれば其れだけ餘分に訓戒も與へ努力をもうながしてこそ先輩の先輩たる所以ではないか其所にナラズ者の向上が行はれるではないか然し賢明なる諸君は人格を以

て不言不語後輩の奮起をうながらうとするかうとうすれば諸君の人格を感得する事の出來なかつた自己の不明を謝し併せて今後努力を盟ひます
△吾等は會山子の先輩論には一言の異議も云はない先輩が後輩を指導する事をしらず先輩が先輩らしくあらすして先輩振つて只人倫五常の道のみ強ひんせせば吾等はかうした先輩には餘り感服は出來ない
△兎に角一年なり半年なり其會に籍を置いた人が轉任早々其年より利益にならないから年賀状はよす一錢五厘損した所では能はないなんて賢明振りを發揮すればカーチキー位の財産は此所近い事でしょう今から御祝辭を申し上げて置きます(僕見た様なこんな馬鹿な事を言ふてる様な氣の小さい奴は明日から乞食かもしれん阿々)
△而し去年まで居つた家だそうして其所には弟分も多勢居る會もどうにかかうにか立つて居るとしたら感情のある動物がハガキ一枚位の事なにかなりそうなものと思ふ
△餘り氣の小さい様にくまれ口を言ふのは此位です
△兎に角山林學校出の人々が學校とか卒業生の會とか云ふ事には冷淡な事はたしかだ其れは生活に追はれたり種々でろんな事に費用を出すよりは他の方面へ出して自己の位置を安全にする方が自己と云ふ上に於て樂をし得るゝといふ考へからかもしれん

がそう云ふ事實は確かにあると思ふ(タツタ年賀状一枚でこんな事を申す程氣の小さいやつでない事と年賀状は只其一例である事を附記して置きます)
(大正五年六月二十日甲州雨端山中にて)
病床より 同 上
△林友四月號で関石隠士の病床默想録を書いた當時私は関石隠士其の人とは面語こそはしなけれ名は度々聞いて居りました大いに同情(口先許りか)して居りました、然し今度不計も此の病床よりこんな事を書かんとは自分で夢にも思はなかつた
△先月の二十三日縣病院長の診察を受け左漫性肋膜炎と銘打たれ病床に臥する身となりました、其前私は長い事出張して居つて私の例の無鐵砲性の風邪位に考へて居りました、病は氣の爲とか此の病と銘打たれると矢張り病はらしくなりました
病氣だと云はれて病人らしくなり
△女々しい様な話だが旅に病みて誠に淋しさを感じました、幸友の市岡、伊藤の二君の居つて毎目映かき私を病床を訪うてくれた事は嬉しい事の一つで深く感謝致します晝は天井を見つめたり庭の青桐の葉の動き方を研究したりするより他に仕事のない身殊に夜私の側に泊つて下された事誠に誠に感謝の言葉が有ります

△恩師安藤長野縣林務課長の本縣治水の御視察の途次御いらがしき身も一門弟の私爲めに御訪問下された事誠に嬉しい一つで有る何と申し上げてよいやら唯涙を以て御禮を致します
△其他久保田君(吾良)丸山君(岩吉)小林君(政基)の御訪問下されし事塚田君(大)關君(琴義)の毎日御書面下さる事小羽根君、佐藤君上田君、中島君、石坂君、矢嶋君の御見舞下され候事深く御禮申し上げます
△幸漸次快方に向ひまして近い中に退院の事になる様な氣(自分にも)が致し候間幸御放念下さい
△こんな、河の爲めにもならぬ事をぬたくると自分の病氣の廣告の様になりますから此位で擱筆しますが旅に病みて初めて友の有難さを感ずりましたから御禮かたぐいこれだけの事をかきます
安藤課長及前記の諸兄に深く深く心より御禮を申します、何れ全快の上は関石隠士にでもまねて黙想録でも認めて御禮にかへます(七月十日病床雷の音をきよつて)
感想 丸山 岩吉
一、生活の分裂といふ言葉がある。僕の現在の状態が丁度それに相當した状態であることに思ひ當つて僕は今迄想像だにも感じ得なかつた此語の内容に愕然として

驚いた。二、僕は今迄自分の上に来る日の常に不安な、痛々しい、悲しい日のみであることは唯單に吾否定の産物であるとのみ思惟して居た。...

樂なことではない。否、これ程辛い悲しいことはない。けれど如何にしてこれを免れ得られようか。...

果以外驚し得ないものであるとしたならば、これ程惨ましい事實は人生にない。然し人の眼は下物を見る人の眼は必ずやそれをなさしめる。

學校記事

○探險旅行家来る 探險旅行家なる坂田溪水氏は七月五日本校に來りしを以て校友會にては同氏に囑し午後より蒙古、滿州、南洋諸嶋等に涉りて探險旅行談を聞けり

大正五年度校友會豫算會記事

収入豫算 總金額三百七十一圓九十三錢

金三百五拾圓 在校生會費 卒業生よりの雜誌代 金壹圓九十三錢 前年度より繰越

も出来なくなる。私は曾て某先輩からこんな事を聞いた「自分は今某學校出の人と机を並べて執務して居るが自分の所へは毎月新しい雑誌が母校から來るのに側の人は卒業と同時に學校との縁が切れたかと思はれる程學校との聯絡がない自分は毎月雑誌が机上に配達される毎に一の誇を以てそれを示して居る」と内容の價値の如何よりも私はこんなところに價値を認めてもらひたい「僕の所へは林友が着かぬ」と詰問してよこす人がある私は斯ういふ人へこそ送り甲斐があると思ふて喜んで直ちに調べて再送して居る

ば校友の多くの方は送金にも都合の悪い山に居るから自然となほざりになり易い...

- 雑誌部 金百四十四圓六十錢
庶務部 金六拾一圓九拾錢
辯論部 金五十二圓九十三錢

二日目の部長會に於てねりにねつた揚句 総支出金三百七十一圓九十三錢

- 雑誌部 金百四十四圓六十錢
庶務部 金六十五圓五十錢
辯論部 金八十三圓九十三錢

金四百拾六圓五拾三錢 卒業生より雜誌代 在校會員會費...

六月の辯論會より

緑葉の間より搖ぎ出づるフレッシュな空氣の漂ふ六月拾七日第二回校友會は催されぬい...

悠然として壇上に登りて静に強度の近眼鏡を動かして乍ら確乎たる信念の叫を説く...

山奥に遠ざかり行く優なる鶯の聲と共に往きてよりは世は鬱陶しき梅雨に入り降り...

片輪の道

赤羽三郎君 我々隨一の人氣男一名座長と仇名さる奇辯を以て人を一笑せしむるは君なり而して...

夏の山

佐藤甲子君 静閑の青年會長たりし人悠々たる態度期々たる音吐「シエイチン會長」の面影...

自信の必要

仲谷馨君 是また新進の辯士なり説く所自信の要にありと雖も慣れざるためしは「語尾」の濁る嫌ありされど努力せば堂に入るや近き將來にあるべし。

偶感

長崎信一君 日頃の元氣のあるに係らず場所慣れぬ故か元氣がなかつたとして彌次の爲に一糸亂れてよく徹底しなかつた益々修養すべしだ

偶感

新嘉先生 日は日光の陽明門の降り晴る京都智恵院の破れ傘に始まつて充龍有悔といふ支那思想より徳川時代の思想に及び其是非を評論せられた亦して吾人修養の一端とすべきだ

花見遊山と浮かれ歩きし花の春は過ぎ梢を渡る涼風に新緑の芳香を送りし初夏の深

寄宿舎通信

小田生 七月十二日夕風涼しき七室にて且生安許多罪

吾人修養に就て簡明適切なる教訓を與へられたるを感謝す 閉會の辭

入舎以來初めての舎生會なりければ新らしく且珍らしき餘興共多く見聞され非常に面白く閉會を告げ申し候
六月二拾日は忘れ難き水道落成記念日にて回想すれば一年の昔山清く氣清く水清しと人に羨まるゝ木會に居ながら降れば濁る照れば濁ると云ふ有様に極めて慘澹なる生活を送りし百餘の學ぶ兒が前安藤校長並に舎監先生及拾二回卒業生諸兄の甚大なる御盡力に依り炊事場湯殿洗面所等に滾々と飛び出でし玉の如き清水を見て漸く憂の眉を開き喜び騒ぎし日に候其後年を經る満一年水は相變らず鐵管を充して流れ多大の便利を與へ居り候吾々は此の嬉しき日を紀念せんため同夜は盛大なる水道落成一週年紀念祝賀會を催し申し候
先づ拾五日の室長會に於て衆議一決するや直ちに三年生約三拾名は寄附金募集部餘興部裝飾部の三部に別れ寄附金募集部員に選されし元老連は翌日より募集に出掛け餘興部員は一二年と共に翌日より練習する云ふ大騒ぎかくて當日には午後四時と云ふに早くも準備は調ひ申候食堂を初め舎の各廊下は裝飾部員の盡力に依り蓋國旗赤提灯等も飾られ御馳走は卓上所狭きまでに取り並べられ二個の五十燭電燈は燦として人を迎ふるが如くに見受けられ申し候食堂には赤白だんだらの幕を張り廻し校長先生舎監先生を始め本日は特に他の先生にも御臨席を乞ひし爲め殊の外賑はしく四時頃開會致し候腹の出來上るを待ちて四時半頃より寮歌の合唱と共に餘興に後から後から續いて演ぜらるゝ數多の斬新奇抜の餘興は人をして抱腹絶倒せしむるの有様實に愉快を覺わし候候かくて七時頃には校歌の拾日には學校に於て本博士の講演あり舎内をも巡視せられ候年内に巡視せらるゝ方は多く有之候も山間の事として博士等の巡視

せらるゝは稀に候
此れよきは愈木會山中に學ぶ吾々の他に羨まれるの時にて晴れたる夕々含窓より望む駒の眺め静かなる朝に氣高き駒より送る涼風等は又一入に御座候
何れ近々中には夏期實習も始まるべく汗に染みたる身体も木會の清流に浸して六根清淨の想を得るも近きことと待たれ候
(七月十一日南寮第十五室にて)

會 員 消 息

- 關谷静夫君 新潟縣關山小林区に轉任
- 坂田勲太郎君 六月中山林技手に昇進
- 加藤朝太郎君 阿寺伐木所掛員を命ぜらる
- 山崎兵平君 仙臺小林区署に命ぜらる
- 市岡正茂君 山形縣新庄小林区署に採用せらる
- 事に決定せり
- 大澤國男君 森林測候所雇に採用せらる但し未だ任地は決定せず
- 坂本光太郎君 朝鮮は平安北道厚昌郡に赴任した同君最近の通信に依れば此頃は鴨綠江岸を毎日通譯さん夫を率ゐて林況調査中がマムシ、ゲン、影しく殊にアトの大軍は所嫌はず喰ひ付くので布袋を被つて僅かに撃退する仕末夜は高山の頂に飯盒枕に不安の夢を結ぶか或はヨボチにてビシテ蓋に這入りシラミに噛られ乍ら夜を明かすかである風呂は二ヶ月に一二回位草鞋かけて二三里も出る派出所の憲兵サンの所に貰ひに行つ病氣でもしやうものなら十里二十里附近には疎ら醫者もない事だ一讀荒涼たる北朝鮮の山中の光景が彷彿するではない乎
- 藤巻壽一君 青森縣川内小林区署に轉勤
- 久保田吉良君 是迄野野林務課に在勤せる同君は今回東京府立農林學校教授候選に榮轉
- 中畑佐新君 青森縣喜良市小林区署に在勤せる同君は今回小崎次郎君 森林主事に任じ安藝小林区署勤務を命ぜらる
- 嶋田雄太郎、小羽根安治、西尾嘉一、三君は六月廿日付にて左の通り均しく昇進せり
- 給月俸二十圓、任山梨、技手、給月俸一圓、
- 内務部林務課勤務を命ず
- 征矢野餘所夫、川岸滋治郎兩君は今回目出度東京駒場林學資料を卒業せられたる卒業生三十餘名中征矢野氏が第一席、川岸氏は第二席といふ優劣なる成績の由、而して川岸氏に既に茨城縣日立鐵山に招聘せらるゝ事に決定せり
- 帝林講習生來蘇 先般東京帝國林野管理局内に開催せられし技術員講習に此程學科試験を終り實習として武

増高尾山に赴き七月十一日來蘇時三日木會山の森林視察を行ひたり本校卒業生は松本木村、市岡、岡田、今井、都筑の七氏なるが當地視察を終へ次第歸京し口頭試驗ありて終了の都合なり云ふ
○中村豊治君は新潟縣村上小林区署に轉任

雜誌費領收報告

金壹圓五拾錢
村上山太郎君
若林遊龜尾君

卒業生諸君に謹告

拜啓時下酷暑之候各位益々御健勝之御事と奉賀候陳者本校友會機關雜誌たる岐蘇林友は年々卒業生の増加するに係らず卒業生諸君より送付すべき誌代漸次遞減する爲在校會員の負擔逐年増大し校友會事業費中林友誌發行の費用は約三分の一に達し從て其他の校友會事業は多大の打撃を蒙り緊縮に緊縮を重ねわ可惜會員の驥足も伸ぶるに由なき状態に有之校友會の爲誠に遺憾至極に御座候就ては今回明治四十三年度以降の誌代未納者を調査し未納額を夫々通知する事と致候間未納の諸君には前述の窮狀御諒察下され此際何卒御送金相成度尙詳細は書面を以て可申上候へ共先づ不取敢誌上に得貴意度如此に御座候勿々
七月 日 校友會長 七宮純雄
卒業生各位

大正五年七月廿三日印刷
大正五年七月廿五日發行
編纂兼發行人 長野市西後町四〇四番地 正夫
印刷者 長野市西後町 丙二十一番地 彌助
印刷所 長野市西後町 乙二十一番地 活版部
發行所 長野縣西筑摩郡福島町二八九番地 澤書店